

ターミナルケア教育における読後課題レポートの分析

高橋美岐子

Analysis of problem report after reading in terminal care education

Mikiko TAKAHASHI

要旨：本稿は、死生観の探求を目的にした、読後の課題レポートを、過去3年間にわたり分析した結果をまとめたものである。

対象は、本学介護福祉学科の4～6期生165名で、学生の選択した本は闘病記が多く、記述内容は、(1)生(2)死(3)ターミナルケア(4)医療(5)人間などに分類された。

その結果、読書によるターミナルケアの学習は、学生が生や死について考える動機づけにつながり、死生観の形成には読書が大いに役立つことが示唆された。

キーワード：読書、死生観、介護福祉士、ターミナルケア

Summary : This paper is a summary of the result that analyzed the problem report of after reading to search for the outlook of life and death for the past three years.

The object was 165 people per 4-6 term of this caring welfare subject, had a lot of struggle against disease records of the book that the student had selected, and the content of the description was classified by (1) life (2) death (3) terminal care (4) medical treatment (5) man etc.

As a result, the study of the terminal caring by reading caused the life and the motivation about which it thought by dying and attaching by the student, and was suggested that reading be useful very much in the formation of the outlook on life and death

Key words : reading, outlook of life and death, care workers, terminal care

I. はじめに (目的)

人が人生の終末をどこで迎えるのか、関心が高まりつつある中、時田氏¹⁾や調査報告²⁾によれば、最近の傾向として、特別養護老人ホームにおける看とりが増加している。また、一番ヶ瀬氏³⁾は、介護専門職は人生のターミナル期に関与する仕事であり、人権保障と自己実現の視点で介護を実践する必要性に触れ、在宅福祉におけるターミナルケアについて述べている。これらのことから、介護福祉教育においてはその教育の充実が求められることになる。

先に実施した調査⁴⁾では、全国的に生命倫理やターミナルケア教育に関しては、系統的な教育が

実施されておらず、教員の多くがターミナルケア教育の必要性を認めながら、理想と現実のギャップを抱いていた。本学介護福祉学科においても同様であり、その現実の中でいかに充実した教育を展開していくのか苦慮するところである。

筆者は介護技術における「終末期の介護」の一学習方法として、毎年1年次生に対し、読書を通して自己の死生観を深めることを目的として、読後の課題学習を実施している。

今回、読後の課題レポートから、学生がどのような学びを得ているのか、3年間にわたって分析した結果について考察したので報告する。

介護福祉学科 助教授

本研究は、第10回日本介護福祉教育学会において発表したものを一部修正・加筆したものである。

II. 方法

1. 対象：本学介護福祉学科1年次生165名（4期生54名、5期生55名、6期生56名）
 2. 方法・手順：1）学生個々に興味・関心のある本1冊を自由に選択する。（ジャンルは問わない）
 2）読後、生・死に関する自己の考えを原稿用紙3枚（1200字）以上にまとめる。
 3. 時期：1）いずれも介護技術「終末期の介護」講義（10月～11月）終了後、課題について説明し、1月末日提出。
 2）介護福祉実習Ⅰは終了、医学一般の講義は継続
 4. 内容分析の手順：1）本を種類毎に分類 2）レポートに記述された内容を1内容1

件とし、類似した内容毎に分類した。

III. 結果・考察

1. 「終末期の介護」授業の概要

1) 位置づけと授業時間数：介護技術150時間中10時間（90分5コマ）
 2) 内容：①ターミナルケアの概念②ターミナル期にある人の変化・特徴③ターミナル期にある人と家族への援助④自己の死生観の探求（読後の課題学習）

2. 選択した本の種類（図1参照）

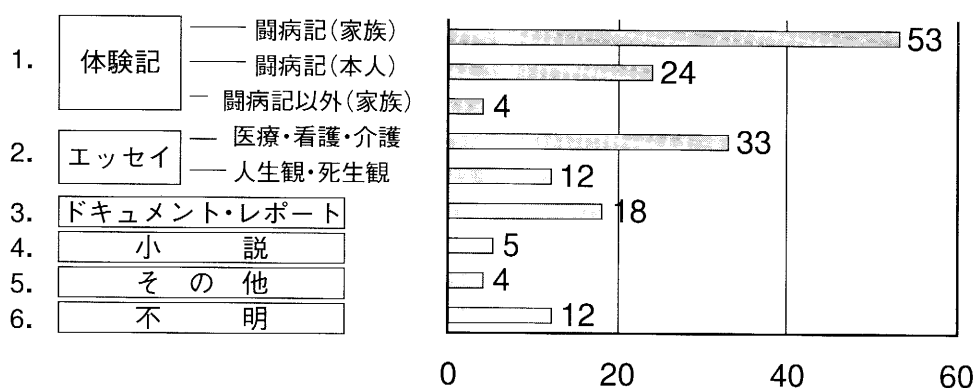


図1 本の分類 n=165

本の選択については特に限定せずに、学生が関心を持った本を自由に選択するという形にした。本の種類によりレポート内容の視点は異なり、偏りがでることが十分考えられる。このことから、読書による学習の限界を明確にしなが、どんな本を選択したかについて重点をおくのではなく、書かれた内容からどう自分の考えに発展させたかに注目した。また、これを機会とし、学生が様々な本にふれ、視野を広め、ひとり人間として多様な考え方ができるよう期待したものである。

本の分類は、読書世論調査⁵⁾を参考に作成した。選択した本は、165冊中144冊（87.3%）がノンフィクションで、その中でも闘病記が77冊で最も多かった。

3. 本からの学び（図2参照）

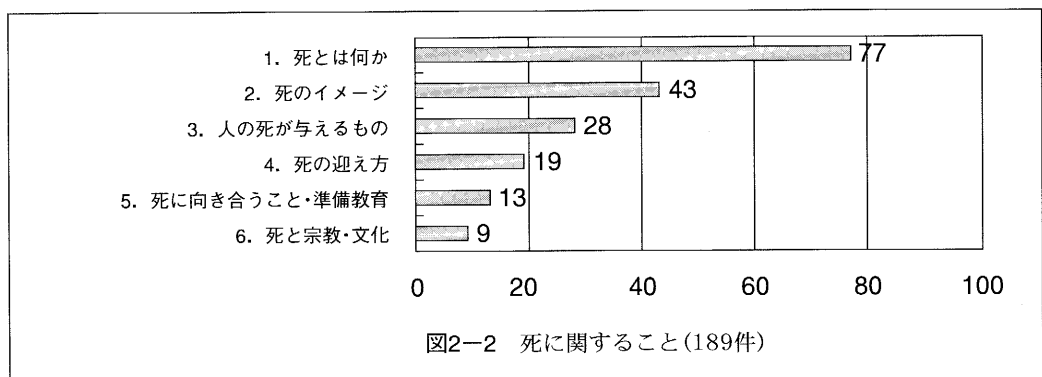
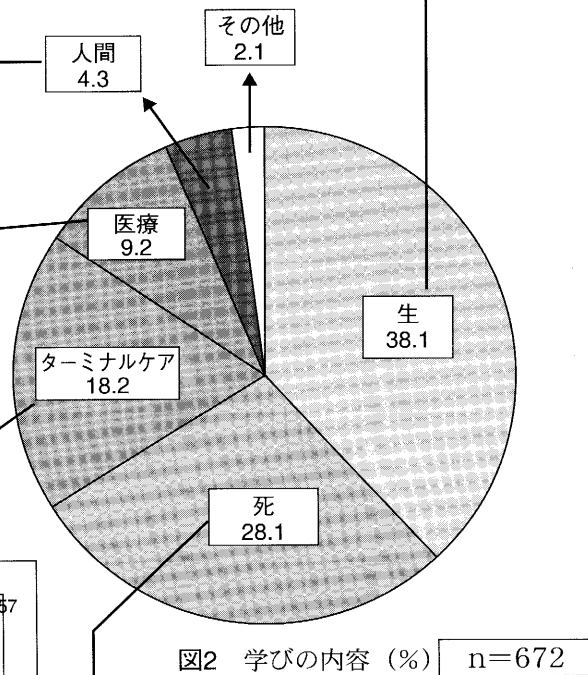
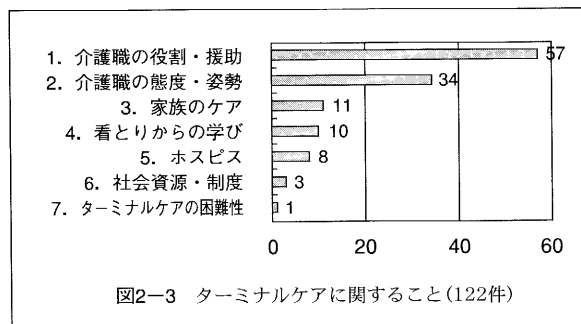
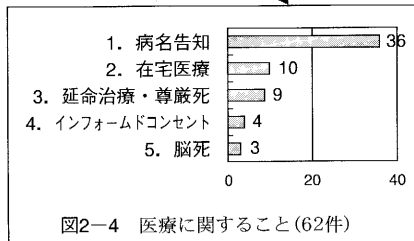
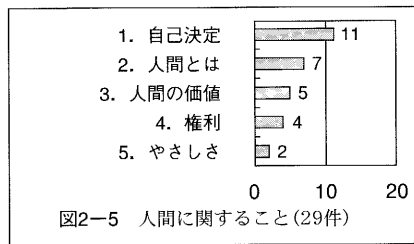
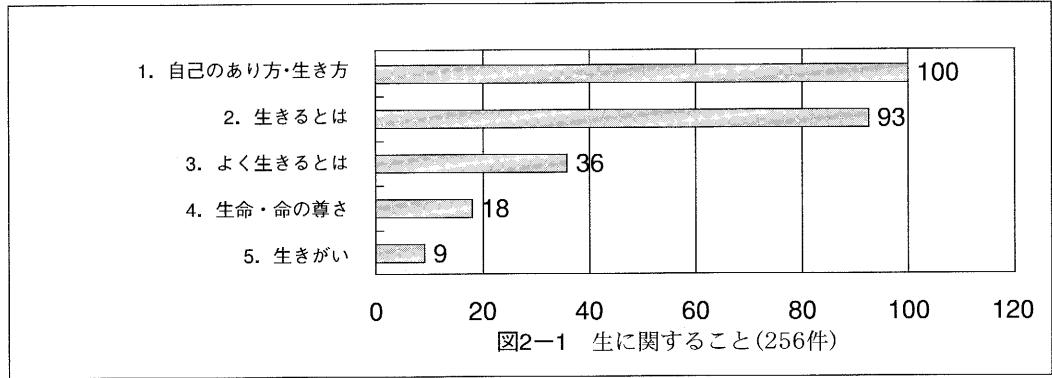
記述された内容は、（1）生（2）死（3）ターミナルケア（4）医療（5）人間（6）その他（自殺、戦争、痛み）に分類された。ここでは、記述の多かった生、死、ターミナルケア、医療を中心に考察した。

1) 生・死について

生については、記述総件数672中、256件（38.1%）で最も多かった。内容はさらに、①自己のあり方・生き方について100件、②生きるとは93件、③よく生きるとは36件、④生命・生命の尊さ18件、⑤生きがい9件の5点に分類された。

死についての内容は189件（28.1%）で、①死とは何か77件、②死のイメージ43件、③人の死が与えるもの28件、④死の迎え方19件、⑤死に向き合うこと・準備教育13件、⑥死と宗教・文化9件の6点に分類された。

柏木氏⁶⁾は、①その人がどのように生きてきたか、②その人がどのような病気で死ぬか、③その人がどのようなケアを受けるか、の3点が人の死に方を決める要素であるとしている。時田氏⁷⁾も述べるように、よきターミナル期を生き、その結果としての良き死を得られるか否かは、ターミナルを支える人の人生観や倫理観・死生観が大きく影響すると考えられる。



先の研究⁸⁾で筆者は、学生が死生観を探求し、深めるきっかけをどう教員が作りだしていくか、ターミナルケア教育においてはきわめて重要であり、同時に課題であることを述べた。

死や生きることについて最近マスコミで報道されることも多く、国民の関心が高まっている。しかし、それらのことを自分のこととして考える機会につながりにくいのが現状である。今回の学習で、死期が迫った人間が精一杯生きる姿や、死を見つめるといった事柄を通して、学生は、死を考えることは、実は生きることを考えることだということに考えを発展させることができた。さらに、今までの自己を振り返り、今後どう生きるのかという、自分自身の人生に置き換えて考える内容が随所に伺われた。

山下氏⁹⁾は、「死をどう受け止めるかは実はそのまま生の意味、人間の価値を考えることになるはず。死を真正面から思索できない文化は決して人間を尊敬することはできません」と述べ、現代における死生観のあいまいさを指摘している。他人の命を大切に思う気持ちが、自分自身の命の尊さが基盤になるとすれば、読書を通して自分自身の人生や命というものを考えることは非常に意味のあることだと考える。

専門職として利用者にケアをする前に、自分自身が一人の人間としてどう生きるかについて考えることは重要なことである。自分の生や命の大切さを考えられるということが、第三者の命や生、QOLを考える基盤になるという観点から、今回の課題学習は十分効果があったと判断する。

2) ターミナルケアについて

ターミナルケアについては122件(18.2%)の記述があった。その内容は①介護職の役割・援助について57件、②介護職としての態度・姿勢34件、③家族のケア11件、④看とりからの学び10件、⑤ホスピス8件、⑥社会資源・制度など3件、⑦ターミナルケアの困難性1件の7点に分類された。

前述したように、ターミナルケアに関する国民の関心は高く、それだけに今後専門職に求められるものも当然高くなっていくものと思われる。特に、従来の医療に注目されていたターミナルケアとは違った、福祉視点に立ったターミナルケアに注目する必要がある。とりわけ、施設、在宅いずれにおいても高齢者のターミナル

ケアの必要性が予測されることに、専門職を目指す学生がターミナルケアに対する知識や認識を持つことはさらに重要になってくると思われる。

以上のことから、①介護福祉士の役割は何かを明確にする、②ターミナルケアを取り巻く日本社会はどのように変化しているのか、たとえば、施設や在宅での看とりの変化などについて動向を知る、③ターミナルケアに関する社会資源や制度はどのようにになっているのかなどについて知識を得る、④ターミナル期にある人の心理や家族に関することなどについて学習する、など幅広い知識を持ち、理解を深めることが重要と思われる。

3) 医療について

医療については62件(9.2%)の記述があり、その内容は、①病名告知36件、②在宅医療10件、③延命治療・尊厳死9件、④インフォームドコンセント4件、⑤脳死3件の5点に分類された。

高齢者の将来推計では後期高齢者の増加が予測されており、平成7年より高齢者の死因はがんが第1位を占め、さらに高齢者の受療率は他の年齢階級に比べ高い水準である¹⁰⁾。したがって、介護福祉士が、利用者の生活を支援するという福祉の視点からみると、医療との連携が不可欠であることはいうまでもない。利用者のケアを展開していくには、利用者の全体像を把握することは言うまでもないが、そのためには介護福祉士が医療に対する関心や知識を持つことが重要であり、学生が授業以外の場面でも学べるよう、その動機づけが必要といえる。

医療に関する内容については、授業時間1コマの一部分で展開しているが、他の教科目との連携で効率的な授業をしていくことが必要である。

IV. まとめ

今回の分析は非常に長い期間を要した。学生は、1200字という限られた字数の中に実に多くの考えや学びを表現していた。部分的には、本の抜書きの部分も見られた。しかし、その部分に学生は共感したのであり、非常に意味のあることと思われる。共感し、活字に表現されたことが社会に巣立ち、具体化され、現実味を帯びたとき、ひとりの人間として成長するとともに、専門職としての啓発につながるものと思われる。

介護福祉教育には、専門的な知識、技術とともに、人間としての成長を期待した幅広い教育が求められる。限られた時間の中で、人間としての成長につながる教育をするにはあまりにも限界が大きいと考えるのは私だけであろうか。

様々な病気をもちながらも、人間は生活者として生きているのであり、ターミナル期にある生活者としての利用者をどうサポートしていくのか、介護福祉士として多様な人間の生き方や価値観を受け入れて援助できるよう、素地となるものが必要不可欠である。

今回の学習が動機づけとなり、2年次のゼミナール学習へと発展させた学生もいる。ほとんどの学生が読書を通して、初めて真剣に生きることを考えたと述べている。学生にはこれをきっかけとして様々な本や価値観、生き方に出会い、自己成長につなげていって欲しいものである。

今後は、介護福祉実習で、利用者とのかかわりを通してさらに死生観を深めることができるよう、授業を組み立てていきたい。

注：

- 1) 時田 純：施設における高齢者のターミナルケア，別冊総合ケア，p.62～71，2003
- 2) 秋田さきがけ新聞：01年11月から1年間の退所者3割が施設で死亡 特養の終末期ケア調査，2003.11.5（夕刊）
- 3) 一番ヶ瀬：在宅介護におけるターミナルケア，p.5，pp.11～20，pp.88～96，一橋出版，1999
- 4) 高橋美岐子，佐藤沙織：介護福祉士養成施設における「ターミナルケア教育」の現状と課題，pp.76～80，介護福祉教育No16，2003
- 5) 毎日新聞社：2003年版読書世論調査，p.19，p.48，毎日新聞東京本社広告局，2003
- 6) 柏木哲夫：特集，死をめぐる：「死の準備」，老年医学，29(9)，ライフサイエンス，pp.22-23
- 7) 前掲1)
- 8) 前掲4)
- 9) 山下京子：彩花へ「生きる力をありがとう」，p.176，河出書房新社，2002
- 10) 内閣府（編）：平成14年版 高齢社会白書，p.67，p.94，p.96，財務省印刷局，2003